

思春期の子どもにとっての動物の意味と役割

— 対人的な不適応と愛着関係の視座から —

樋口真生・山本力

(^{1, 2}就実大学大学院教育学研究科)

1. 問題の背景と目的

動物（ペット等）と関わりを持つことにより、学校不適応、精神疾患を抱える子どもたちに、よい変化が起きたとする報告が幾つか見られる（村瀬,2001,等）。筆者はこのような変化が起きる背景に動物との「愛着関係」が重要な役割を果たしているのではないかと仮定している。しかし、人と動物との愛着についての先行研究は少なく、動物との間で獲得した愛着を、その個人がどのように生活に活かしているかのデータは確認できない。

筆者は不適応傾向を示す思春期の子どもが動物との愛着関係を築くことにより、対人関係の様式にも何らかの変化が生じるのではないかと仮定し、検討したいと考えている。本研究の目的はその前段階の調査として、動物介在療法等に関して先行研究のレビューを行うことである。

2. 方法

論文検索のアーカイブである Cinii や j-stage において検索を行った。Cinii では「動物介在療法」のキーワードで検索したところ 115 件、j-stage では 134 件の検索結果となった。また、「愛着 思春期」のキーワードで検索したところ cinii にて 29 件、j-stage では 348 件の検索結果となった。

3. 文献レビュー

(1) 動物介在療法

日本獣医師会の報告（2009）では「動物介在療法とは、患者の治療効果を向上させるための補助療法であり、動物との触れ合いや遊びを治療手段として活用し、身体的、社会的、情緒的および認知能力の改善をもたらす」と記されている。動物介在療法の第一人者である Levinson(1962)は、動物が子どもたちに、生活場面での目標設定をさせ、自己や他者の受容、自己再構築など幾つかの効果をもたらすとしている。

(2) 動物が効果的に関与した治療事例

上記のような効果が見られるという報告がある一方、日本においては動物介在療法を実施する場はあまり見られない。しかし、心理療法で動物が非常に重要な役割を担ったと考えられる幾つ

かの事例報告がある。村瀬（2001）は動物が CI に治療的役割を果たしたと考えられる 22 の事例について記述し、動物の治療的な役割や意味についての検討を行っている。その内の一つには、養父母との家族関係がぎこちなく、学校でもうまく周囲にとけこめない 14 歳女性の事例が挙げられている。彼女は飼い犬を通して Th と会話し、飼い犬との関わりの中から受身がちな自身の対人関係の様式について洞察を行っている。この CI は高校進学後、自ら積極的にリーダーシップを取れるようになったと村瀬（2001）は述べている。この事例は動物との関わりが後の対人関係様式に活用され得ることを示唆している。

(4) 思春期の子どもと動物との関係

思春期は愛着対象が親から同性、異性の友人などへと移行していく時期である（生田,2006）。

片岡・園田(2010)らは、愛着の移行は既存の親子関係から離れ、新たに親密な関係を自身で選択していくことであると述べる。では、そのような愛着の移行期に親以外の他者との愛着関係を持つことができなければ、子どもたちは愛着の拠り所を見失ってしまうのではないだろうか。

中嶋・菅原(2006)は、青年期前期の子どもたちは自分の体の激しい変化や自尊感情の欠如により、不安と極端な孤独にさらされると述べている。しかし、ある一群の子どもたちはそのように対人関係の形成が困難な時代においても、動物が相手であれば心を通わせることができ、また動物は居場所を喪失した子どもたちの行ける場所になり得ると述べている。

4. まとめ

- ・動物との関わりによる成長はけしてその場限りに役立つだけのものではなく、後の対人関係にも活用され得る。

- ・青年期は愛着対象の移行期であり、不安と孤独に晒されやすいが動物となら関わりやすい。

筆者の今後の展望として、動物との愛着関係が対人場面にどう活用されていくのかを質的研究を用いて検討していきたい。